



諸國
會
年中行事大成

卷六

76
3352
2



諸國
圖會
年中行事大成卷二之上

二月之初目錄

上五 國 韓神系 坂支

初卯 八幡系 系 大原野系 系

初午 稻荷系 系 東福古懺法系 江戸所々稻荷系 大坂所々稻荷系

摩耶系 抄法 水間系 和泉 日吉八王子系 辺江 観音寺藤取 三河

上未 馬系 尾張 招魂系 河内 巖瀨渡座系 并 猪口開 安藝

上申 春日大宮系 大和 梅津葦篠系 系

中酉 梅津葦篠系 系

上丁 釋奠 江戸 ○社日 社祈雨 ○彼岸

下旬 水口系 法玉 孝濟廣純 坂支 天王古佛定會 吉野候配 大和 二月堂修法

朔日 寧如上人忌 系 藥師會式 大和 佛光寺歸撒 伊賀 鬼押神夏 伊賀

藥師會式 大和 佛光寺歸撒 伊賀 鬼押神夏 伊賀

佛光寺歸撒 伊賀 鬼押神夏 伊賀

鬼押神夏 伊賀

二月堂修法

吉野候配 大和

孝濟廣純 坂支

江戸 社祈雨

二日 藤森祈年祭 未 任吉祈年祭 大坂 任吉植使 大坂 行基祭 持持

二日 亥

三日 知恩寺百萬遍數珠拜見 未 箕面二富 持持

四日 祈年祭 及豆 清盛忌 未 天王寺芥田坊法事 大坂

五日 東福寺五大堂火祓除神符と出丸 未 天王寺太子堂修二舎 大坂

六日 仲哀天皇忌 小塚遠列忌 未 天王寺太子堂修二舎 大坂

七日 任吉祈年祭 伊勢 祈年祭 大和 二月堂大炬火 大和

八日 推守修二舎 大坂 原村天王祭 持持 祇園寺八海 未

九日 釈迦堂遺教經 未 貴布祢又教祭 未 大通寺遺教經 未 泉涌寺舍利并此 未

十日 第六天神祭 江戸 神軍 佐波 五條天神恩頼祭 未

十一日 加茂氏人養應 未 麻苑院天神祭 未 五條天神恩頼祭 未

十二日 大原懺法 未 列見 及豆

十三日 菟原恒吉祭 持持 氷上祭 周防 二月堂水取 大和

十四日 所々涅槃會 大雲院 佛光寺新坊 唐山寺 淨福寺 報恩寺舍利并帳 未

十五日 梅尾四座痛式 未 源成柱拵 未 山崎宝古定帳 未 西行法師忌 法園

兼好法師忌 法成 増上寺涅槃會 江戸 天王寺涅槃會 大坂 多田院祭 根津

真福寺常樂會 大和 麻走 大和 走山祭 豊前

十六日 積塔 未 淨教堂踊躍念佛 未 奉滿寺日蓮上人像開帳 未

大雲院貞安上人忌 未

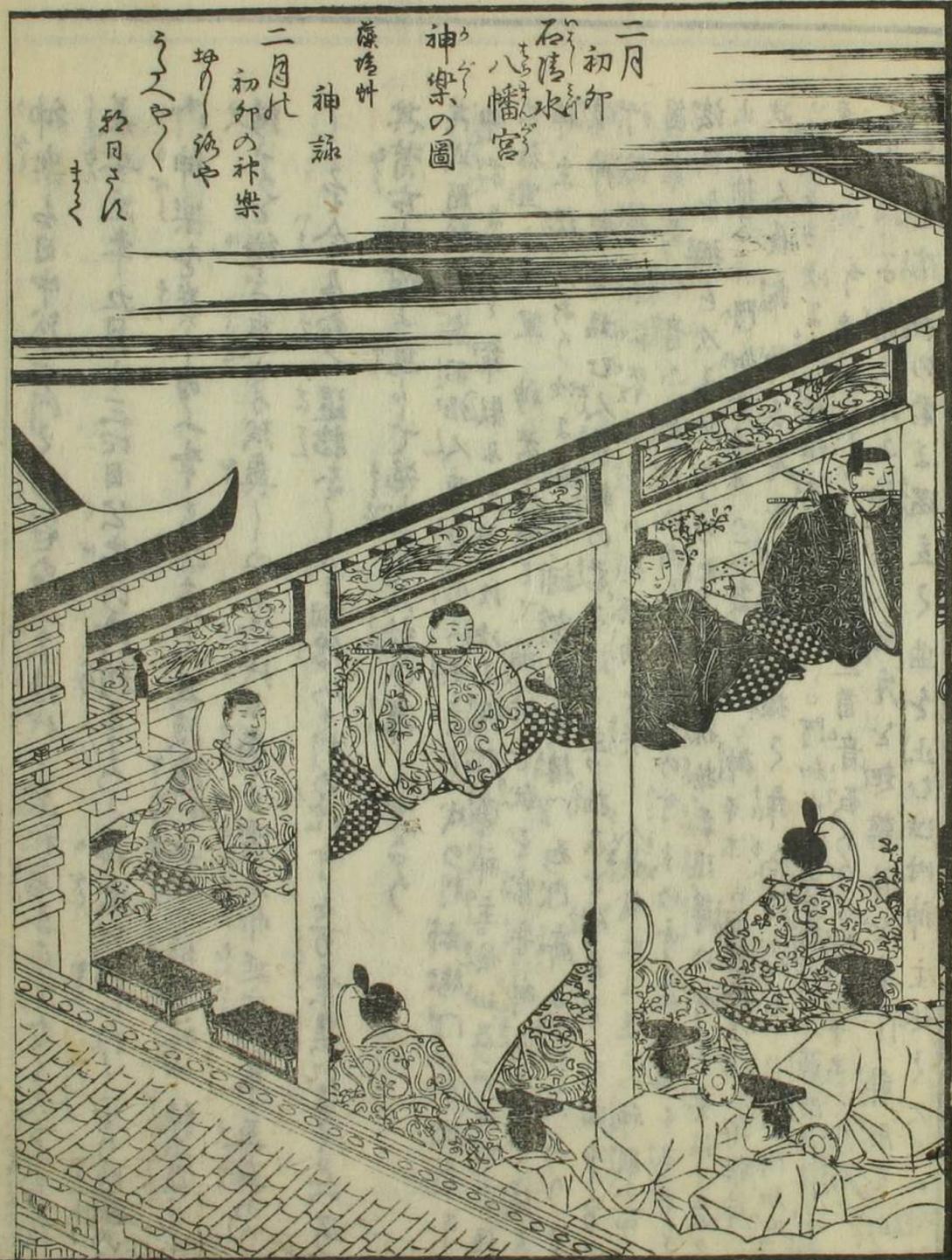
十八日 大悲山觀音會 未

十九日 貝寄風 大坂

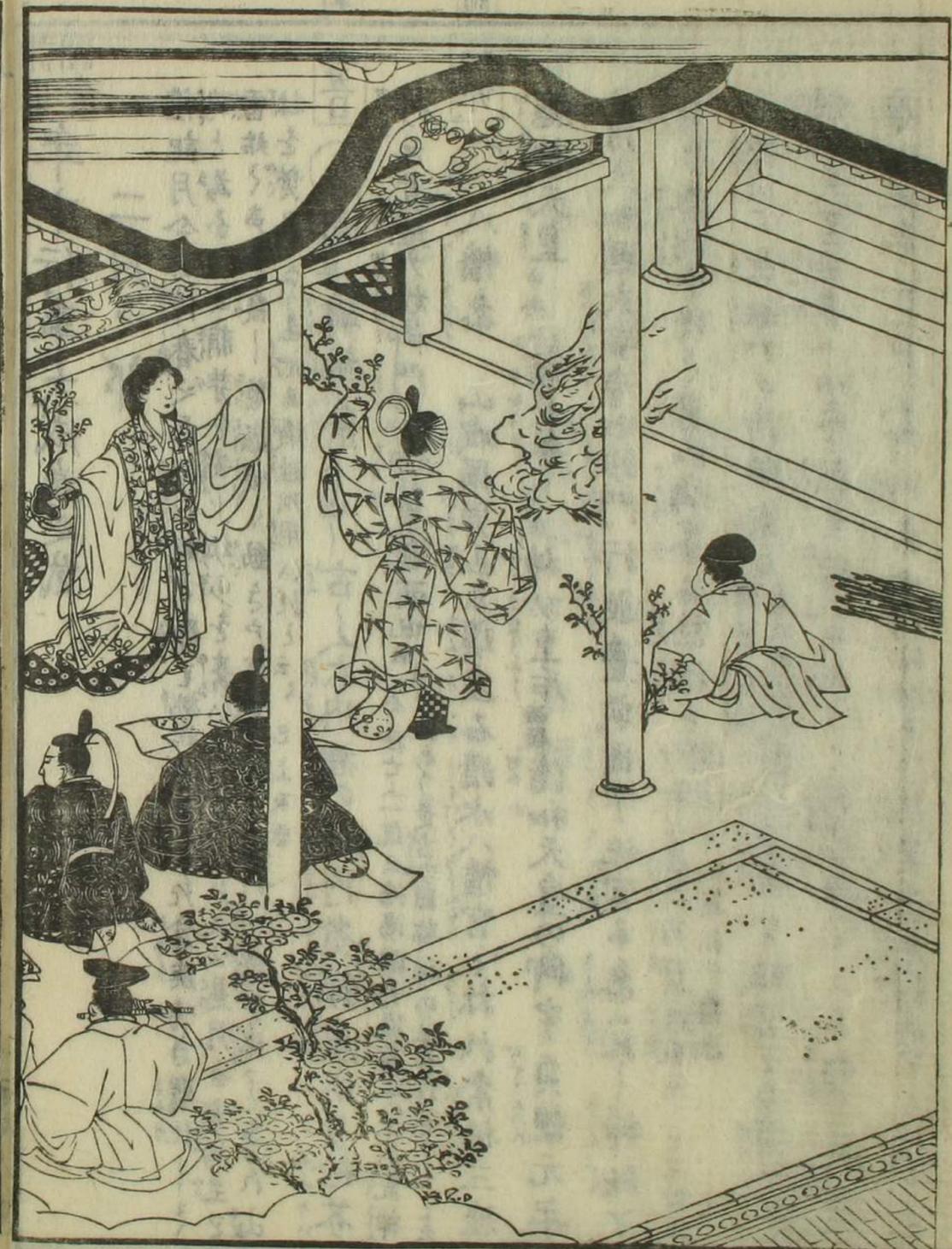
廿日 淡間祭 後河 光明峯寺殿下忌 未 兩本願寺太子會 未 下谷稻荷祭 江戸

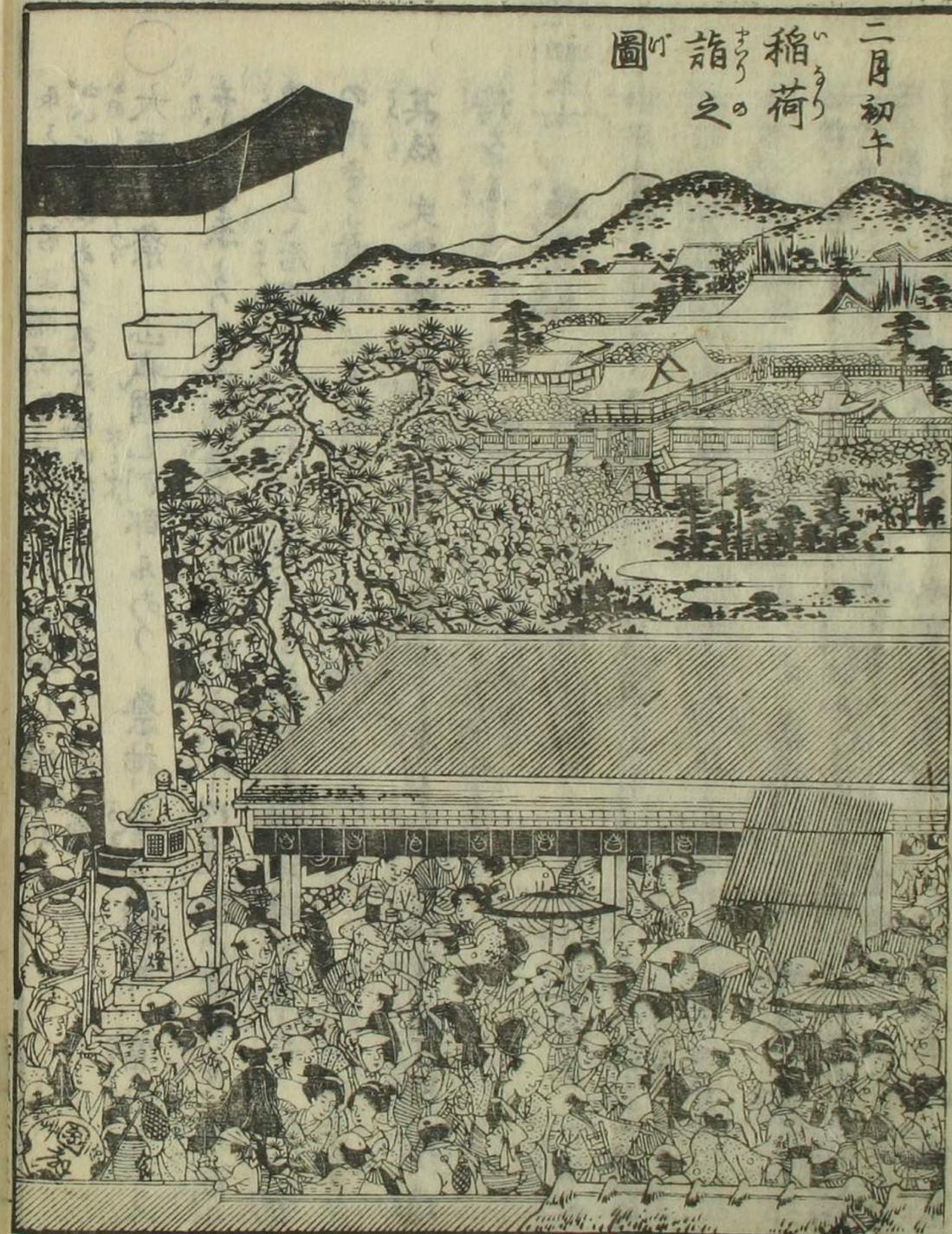
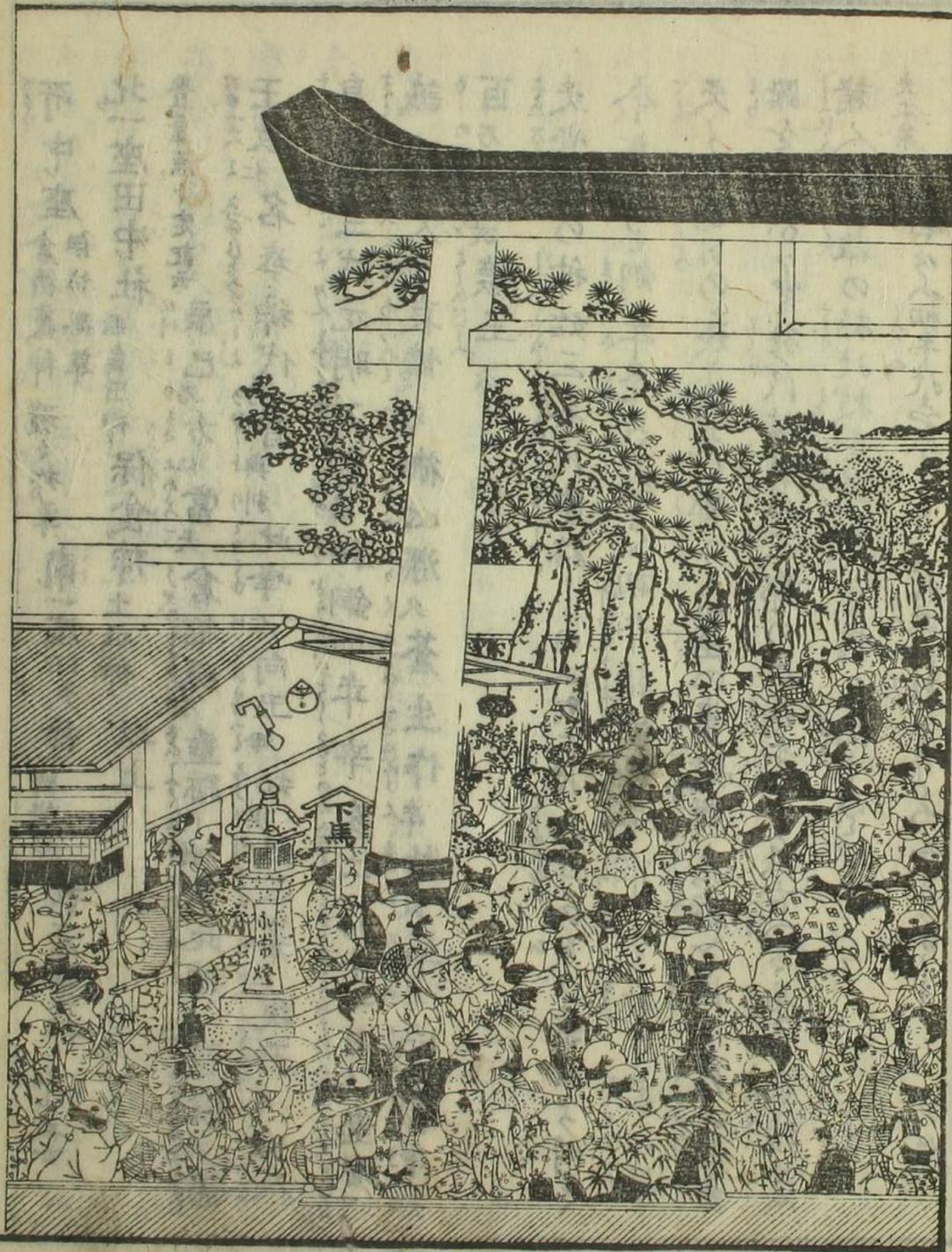
廿一日 加茂松下家後鳥羽院清忌 未 太秦廣濟寺其修所太子會 未

天王寺聖靈會 大坂 舍利寺太子會 大坂 法隆寺舍式 大和



二月
初外
石清水
八幡宮
神樂の圖
藤巻州
神詠
二月此
初外の神樂
坪の汐や
うさや
初日さん
まき





所中座 倉稻菟神 瓊々杵尊 南一座四大神 御諸神 稚産靈神 大山祇女

北一座田中社 飛鳥田神 保食神 土祖神 以上

豊葦原卜定記云 辰巳乃方仁當天 倉稻魂乃垂跡 阿利夫此神 波百穀於播

玉故仁名奉神代 昔典利此峰 仁向王母 知須只三峯 仁現王 之波人

皇四十三代元明天皇乃和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸

誠仁諸人於哀憐乃御心深久蒼生作牟物波草乃片葉未天

百乃災 於攘王云々

夫當社の神始三峯に垂跡一の二月初午の日うかぶよの

今本至仁例年是日と云く初午詣亦巳午市とも稱一若日早

天より當日の夜小賢び都下近國の貴賤群衆同く仍人容易

路を遮ふこと能は其願ひ三都の内是をとり右へ是日系詣ん

諸人神籬の杉北枝を折帰る家本納一也

夫本集 二月やう初午北志取と云く楠若の杉より云々

光後

鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外
鳥獸の折て今と傳てうは色の家く小玉細工の狐鈴或を布袋西の遊治郎偶婦其外

惠日山東福寺懺法 楠若の山あり 當社之藤原秀郷勅命

鳥森縮荷系 日比谷二町目あり 當社之藤原秀郷勅命

奉々平將門謀伐の時之於ふあり 此所小教傳せし也

悪岡縮荷系 上野ふあり 太田道隆勸請

王子三圍 其路不縮荷社小詣と

真田山 杉山其好所縮荷系 道筋 津城の迎色別して振

今日三都及び諸國ふある所の縮荷社 諸人影一 畷之

摩耶系 撰別菟原郡畑村山上あり 佛母山切利天上寺と号

當山の系剣を天武天皇の清宮ふ支那法道仙人来朝して摩耶夫人の像

を作を伽藍を建宮以上絶系にして蒼海邊小眺をむ勝是

今日會日と一辺隣群をふ一又獨馬の無難を祈ふと、馬を退ひて藉以土塵

に昆布以調へ帰ふ是を摩耶昆布といふ

江戸

大坂

醫國

○水間系

泉列泉南郡小あり

龍谷山水間寺と云

聖武帝云

勅預もよみく僧正行基天平年中に開く所なり奉尊觀世音云 天皇
二月初午靈夢を得ゆい行基奉勅して是を求し先づ師此地に於て
十六童子も遇ひ神龍觀音の像を護持し与け奉るの儀なり

天皇の靈夢二月初午の日なり候をりゆく御年今日を會日といは是城水間系と
りて産小草薺を齋ふ

○日吉三宮八王子祭

江列滋賀郡坂幸にあり

今日下の八王子の社より神輿之上
八王子の社へ送りなされ

○觀音寺縁取

冬列保飯郡小松原にあり

今日諸人山上の隈毎に取淨氣を奉る

馬の於て河を渡れを厭ふ押今日取らるるを獨り對と念念するところ又南海の波
記し奉るを對り付たりあり枕を下に置き過ありと云

上未

○鳥祭

尾列熱田御回神社供御

年列大宮系文庫の系小竹く祝座長鳥と
記して平氣と云馬祭と念言て後神幸あり

上申

○春日大宮祭

和列添上郡三笠山の麓も鎮座在り

祭神四座

第一武甕槌命 鹿島神

第二齋主命 香取神

第三天津兒屋根命

春日神

第四姫太神

人皇四十八代額德天皇神護景雲元年十二月七日

大和國城上郡安部山も御座同二年正月九日同添上郡三笠山も垂跡

同年十月九日寅日寅刻太敷官柱を立云

春日系と云大宮の神

復りて二月十一日申日一年に兩度あり

初申日式日なり
其式後日より神を打と是より

其外御供物等悉く

禁裏より献せしむ

其式後日より神を打と是より
祀入る申日上御神系向神式

て成日の小系も後系七ケ日

其式十一月申日の系下にもあり

新古今

新古今

二月の初よりなれや喜日なりと云

入道因白
大政大臣

新古今

二月の初よりなれや喜日なりと云

後撰

新古今

二月の初よりなれや喜日なりと云

後撰

○招魂祭

河列河内郡出雲井村牧岡神社の系

祭神春日小日

公事根源云

二月の初よりなれや喜日なりと云

○巖島鎮座祭

安藝國宮崎小あり

二月初申の系又山に因系と云

○道芝記

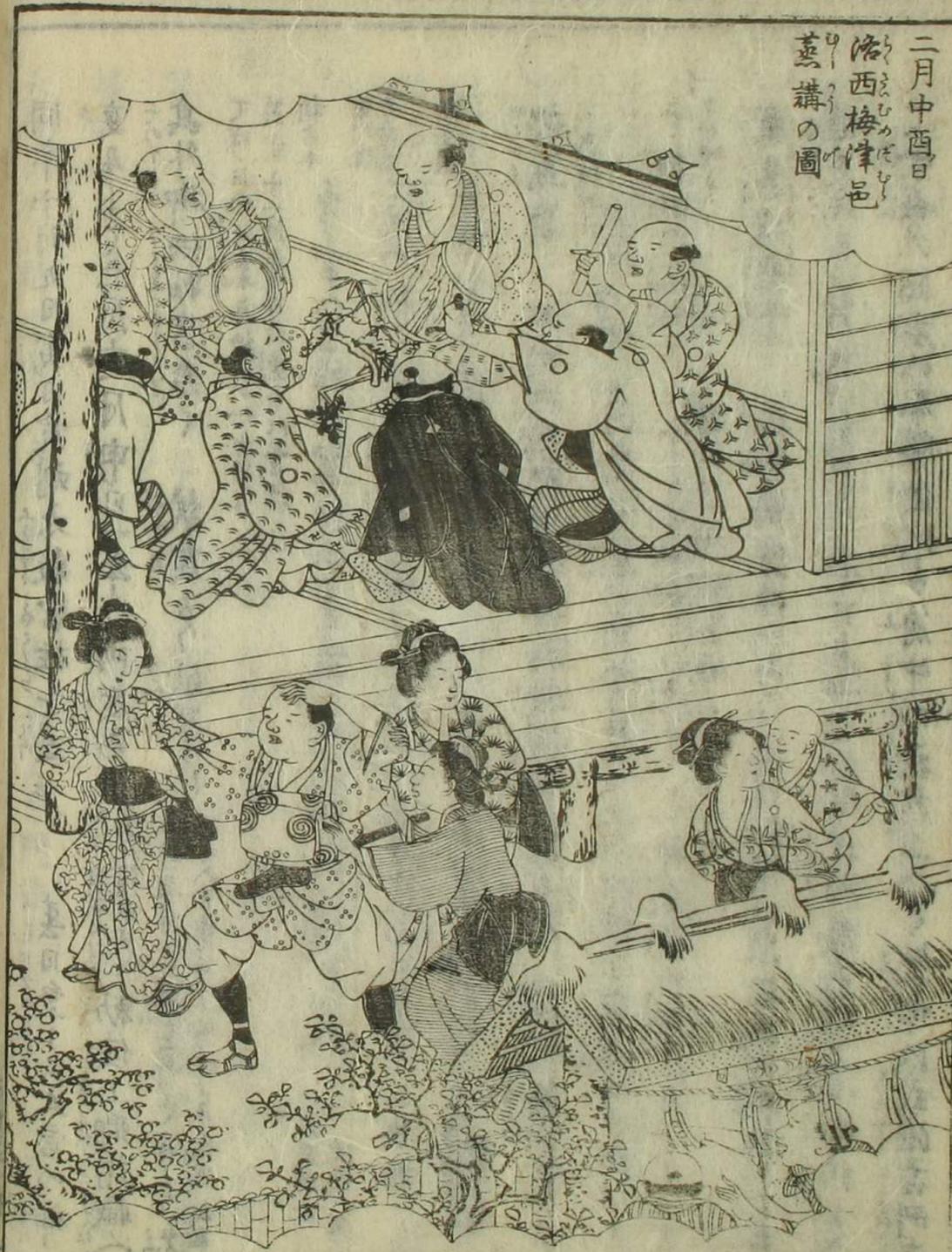
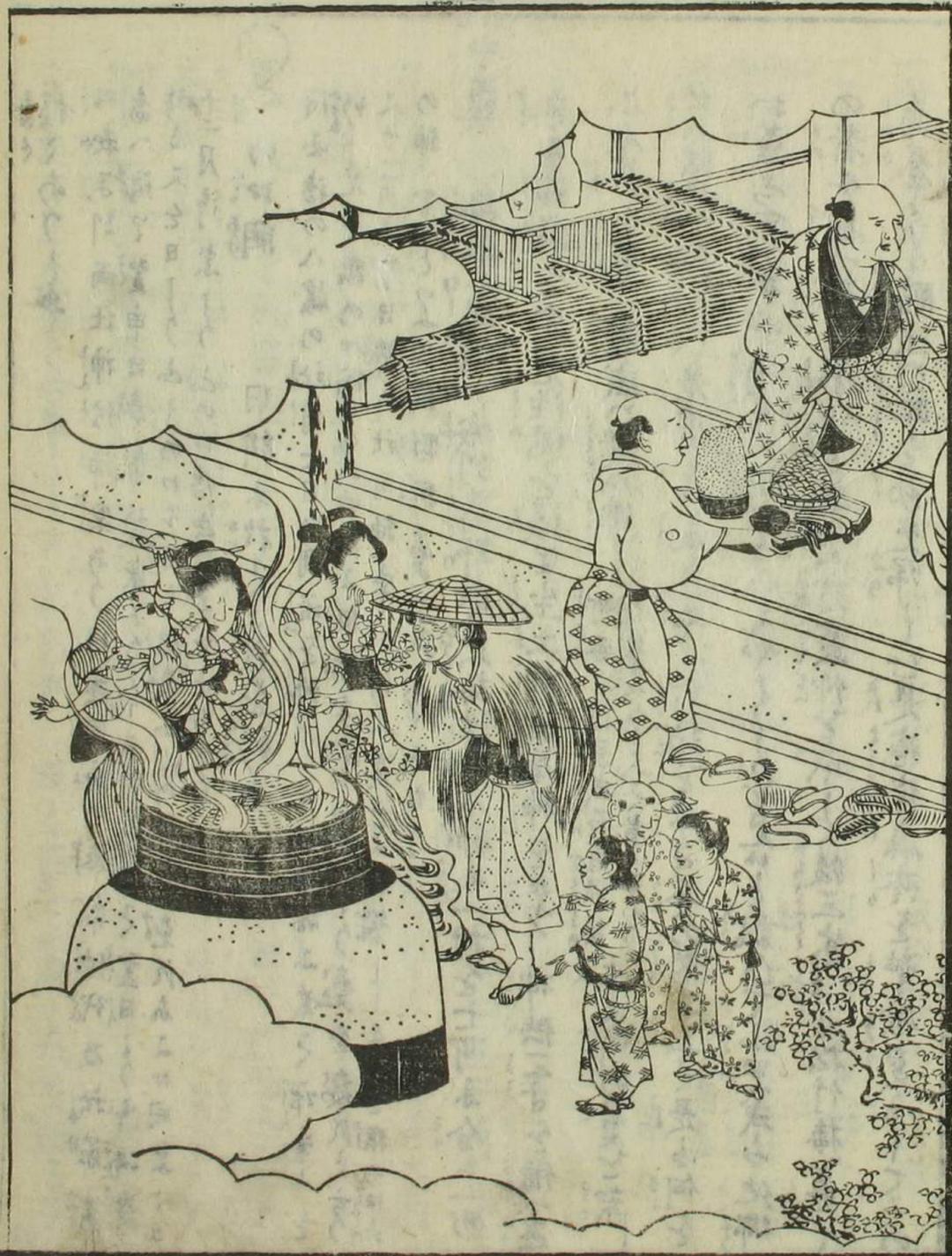
云正月末の支日より今日迄十日の間祝昨巖島の上の齋所小入

○て紫秋

以國府の奉幣使代も府中の齋所小入く紫布以式法古例ホ

○て紫秋

以國府の奉幣使代も府中の齋所小入く紫布以式法古例ホ



移りありとせ

此起子刻両社神位神樂あり日夜國府の奉幣使代及社家者
島へ渡り望申日奉幣神樂あり今日日東畢く望日より津浦より
訪ふ又を日より山くの口を閉き越す山人の出入を免れ又口閉き
十一月津東より山の口津よりホを止む

○後のは開

日所小松くを移す
日玉清の八幡の社司七日の同後を修し今日日清小松く神事
は是を後のは開といひ山は神樂多し今日より奉幣を越し
又十一月上申日伴の社司神事といひ又なる小松くといふ
の神事といひは後神樂を入るなり

素師

中西

○梅津蒸講

城列葛野郡東梅津村小松之一村を七所小分ち一所

毎小頭屋を定先注繩を張生土神松尾神をあり神供三寸を備へ
小大金を置き醴或ハ醴以沸し附毎小頭屋或ハ葛根屋上は竹の葉と架し
茶以末煮ナとより老波安菘菜を煮し竹節とほと釜の茶小まき何そ
お蒸ちやかせせ唱まは側よりいもやうと見いと親ひて小児或ハ他郷
の者を捕へ抱と釜の上にて三夜蒸伴と成して後二室を松竹梅と師て
島屋と醴或ハ醴を勤先師し是痘瘡麻疹を禁厭支ゆてその

戸

上丁

○釋奠

湯島聖堂に於て行つる始ハ上野聖堂小あり宣永元年十月

一村の小児痘疹の難む罹く命と預き者ふと云是孤守傳之他郷の者も
こ小末坊は幸ふ與ふそのを其後頭家も於て其町の者を餐應と
俗を寫盛り胡蘿蔔餅魚各食し終て後松を敷を打是小合して
葉煎等をみす許小切膳の松を並出さ各食し終て後松を敷を打是小合して
願経を誦し念佛を勤畢く室中に監水とら家以清光再び酒宴
今日より神の宿と稱し其室中不浄の草屋中に入るを禁は
今日より神の宿と稱し其室中不浄の草屋中に入るを禁は
公事根源云是々年小二夜二月と八月と小あり若日蝕國忌祈年の祭
打せみあられ中の丁にありき續日本紀云文武天皇大宝元年二月
丁巳始り行つる光仁天皇室龜六年右大臣吉備公礼典を松島に於て
祭物始て修し礼容観べし是先聖先師をまつ從て十哲を祀る
奉朝親奠の式と享日未明五列小郊社合其属ハ及廟司を率く先
聖の神座を廟室の内中楹の間に設く先師顔子坊首座と関子騫
より再有すは儀々四座と文宣王の東も設く西を上座といふ事路より

子夏中での五座を文宣王の西小設く東弘上座とい併く十一座何と
南島向小其牲と六衛府よりこれを進む陳設の品々執事の負敷亦延喜式
小詳之 其旧地京師神泉苑の西小あり此祭奠
今東都小移くことを記す

月令

社日 ○月令云二月の節元日を擇んて民小令して社と云謂春交興
社稷を祀農事弘初元日ハ春分祭後小迎と成日を云之 今日雨あると
社稷雨と云

月令

彼岸 ○七ヶ月の間諸寺院小詣佛事他善を修ん其中日を附正と云は是日
輪の運り赤道中一昼夜寒暖等しく中和の候なるを以佛家これを佛徳小
表一波羅蜜多と云 波羅蜜多と梵語なり
蓋安養淨土の彼岸小到るの謂之
善小も是と到彼岸と云

月令

下旬 ○水口祭 農家水田の小多あり 神代卷云天照太神喜で田是物ハ
顯見蒼生食く活しむと云と粟稗麦豆を以て陸田の種子と一稻
弘りつゝ水田の種子と云と農家彼岸の前十日小穀を水に漬彼岸乃
後十日小取出し種を下り是を苗代と云六七日と修く苗弘生ハ四月迄の
土用中吉日と撰て農民高穀の種を水田小浸し種播と云田の畔小三刈稻

故夏

苗と水と得られん故小苗代水を引の口をある弘水口祭と云
萬葉 五十串立神酒座奉神主部之雲原王陰見者之文
季御讀經 今徳く毎一
に次第之 春秋二季百侶を南殿小信して大般若
經を讀しむ其内御前僧口を定く御殿小於仁王經を讀しむ納言參議
各一人南殿小着く夏を行ふ

京師

朔日 ○實如上人忌 明日日山科西奉教寺淨坊小於くこを勤む上人ハ
奉教寺九代目の門主也て蓮如上人の子なり大永五年乙酉二月二日遷化
春秋六十八歳 同云大明の詹仲和は之者實如上人の徳行を傳(傳)自作と画
奉贈日本山科實如老上人

大坂

天王寺六時堂修正會 今日酒の刻より翌二日小至内衆僧
六時堂小於く法夏執行樂人音樂を勤む

諸國

吉野餅配 和州吉野藏王権現堂前小於くこを勤む寺を金

諸國

孝山寺山を國軸山と云ふ威徳耳根山云日奉七高山の其一ツ云

神社考云後小角始め當山修行の洞神釋迦如來の容を泥しり

行者曰は清貌を末世惡趣の衆生を度し難しと云次は弥勒の容と

現む行者曰未あり次小藏王忿怒の形相を現しり其状甚怖

る見真より行者曰是我邦の能化なりとて其像を損して奉さ

ると云清長二丈六尺と云今日華供懺法の両行人懺堂方と懺法と云

及び神人奉堂へ出御供神酒を備へ幣以捧げ祈禱あり其外満

山の堂社へも残り御供神酒餅等をなれ其後藏王堂の廢庭へ

夥しく餅をなれと云後の人小施し又は餅を下使の家婦曲意よ

入頭奉載さく若聖山中の院へ家へ穢し是を解せしと云

解配しと云古例は餅を揚州西成郡漢村源光寺より饒解を同國位

を奉の首若聖王の神人平聖大志松と云小施りは饒解を乞

ははは時大志佛寺より其饒解未廣扇を許す二束を流し若

聖の神人小施を神人は是を流して若聖小降王再び若王権現守勝

手此の神は依りたりて後是を破碎きて多くの衆の中へ交吹く

再ひ餅を奉今日の祀餅と云る例なり國々毎年三月子守勝の神

奉小平聖大志佛寺より奉く神夜を勤免又春秋彼岸時二月の日に天王

御供を融通を佛會を流して依て大念佛寺の位傍に天王寺小施り會小

與ふは時若聖より奉く大念佛寺上人小供を以是をを師と稱し是は融通

念佛の完經より傳り例ありと云

二月堂終法 和列南都東大寺にあり今日より十四日迄二七ケ日の間

これを行ふ奉き觀世音の緣大小二懸り今日より七日あまり上七日

と云大緣觀音の宝冠より八日より十四日小施を奉七日と云小緣

觀音の宝冠よりこれ流して所東大寺の禱侶今日より十四日中て奉流

あり是を流し一人奉小平聖大志佛寺より奉く神夜を勤免又春秋彼岸時二月の日に天王

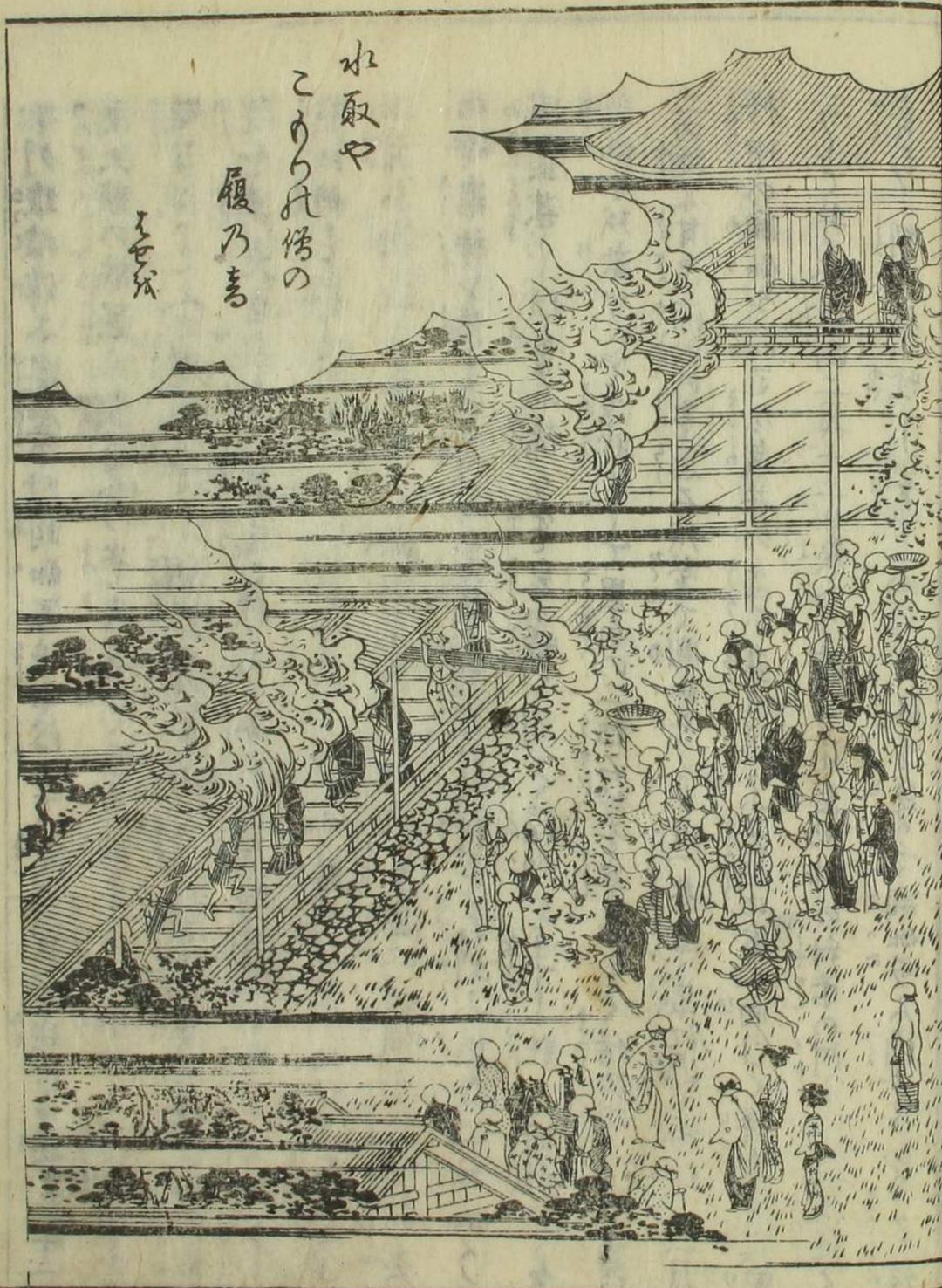
又奉詣の男女不願あり者曰く佛を流し通夜を七日の夜十四日の夜

とも小水屋の井一名若狹井の水を汲み流し奉り年中供さる雨の

圓伽水と云且は水取りて牛王を押しは井と二月堂の堂下禱の宮のわら小

是古東大寺實忠若狹國

遠敷明神の靈感奉依り水取得る例あり元亨釋書云實忠一日

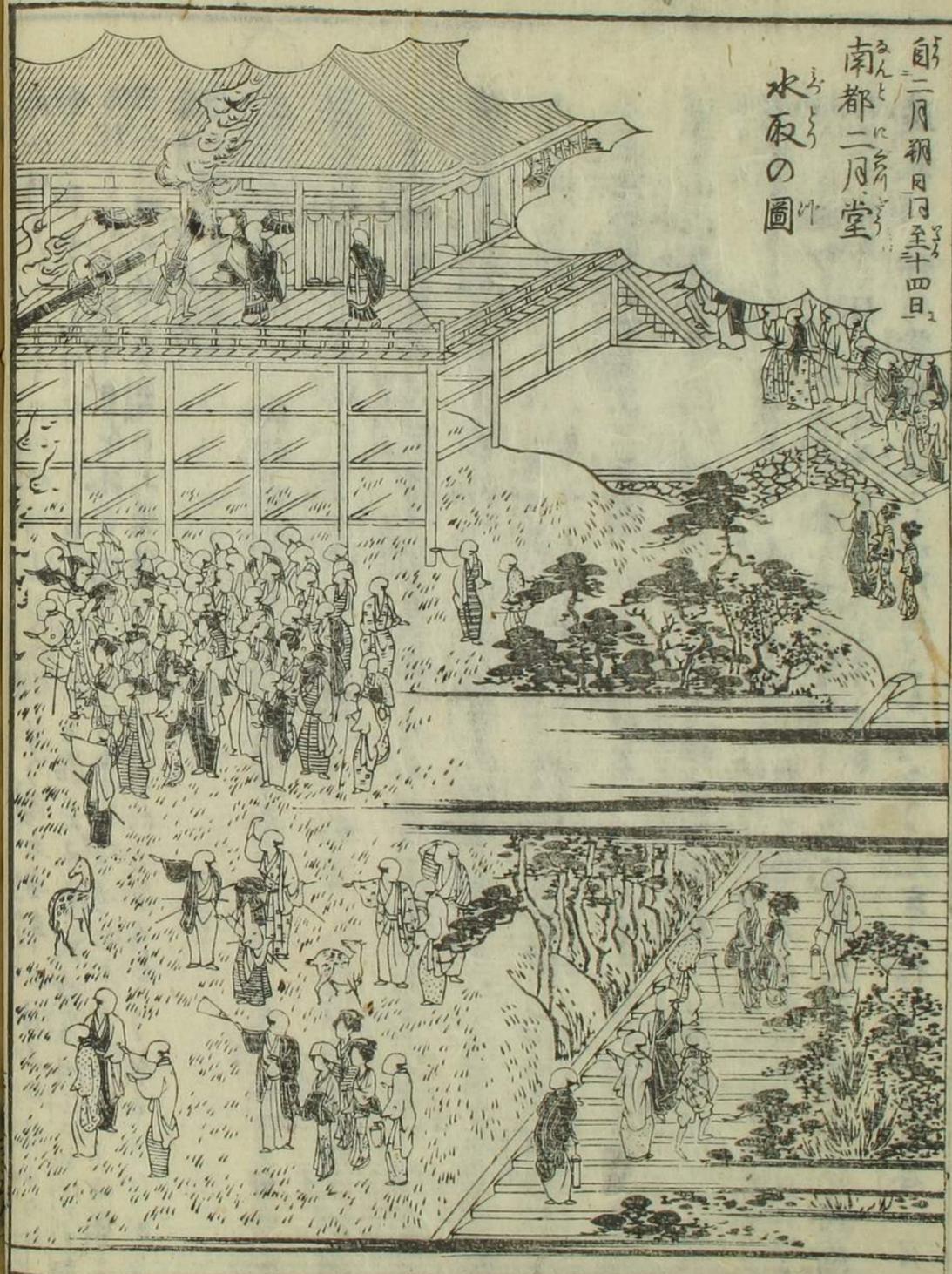


水取や

こゆりれ傍の

履乃事

とせ



節二月朔日乃至十四日

南都二月堂

水取の圖

掛列雅波津小遊歴の附園伽藍浪小浮して来る状見の辺に観音三十一
面大悲の像及小駕のり安忠喜と是を取小銅像なり其長七寸
暖り付て人の膚のふく朝延を終を聞石され東大寺小於く胃宗
院を建是を安重以實忠と終り每歳二月朔日像小對して兜率
範孤佛を致して二七日依り二月堂と云天平勝宝元年に始り大同四年
小至ふ迄五十八年嘗て缺ふ事あり初先安忠二月讖を修む初夜
の時衆神と清くて名簿を續ててされ孤竹を若列小遠敷の神あり
威靈甚しは會小祿り安忠を讖と聞り渴仰を生じ託り同於り
園伽藍水獻せんや忽然として黑白の二橋石地を穿透せし傍の樹小よる其
二の跡小甘泉涌出に安忠石公梵で園伽藍と云い一年早業に遇て年圓と二月
修中の園伽藍を園了後復井の毛小集り遙く若列の旁小向りて持念を須臾
しりて年水盈満二月十二日夜あり其時遠敷の神の社本の河水に流絶と
音あり列氏大不怪し蓋し神に流を送りて園伽藍小通さるるなり

列氏其夏を聞り河と名付り音垂川と云疾痛ある者は園伽井の水と飲
む多く金をせと今よ於り七日十四日の西東修法の時僧徒紙衣を先
廊下於歴り堂小入り替りて堂と巡り有髪者大炬火徑一尺餘あるを
十二本持りて廊下と上り堂於色れ此時堂内の天井小炬火とけり炬
炬火小て著る炬火の煙頭衣服の下小最僧
を爲て火災の難ふ又系傍の群衆堂下に先く炬火の煙頭衣服の下小最僧
爲るとも少くも火傷の憂あり各け火と接ひ驚小入り居るもの多し
仍替畢る各仍法あり時小至りて兜率若獲りて三反りすと等しく
洞井より水涌出り是を汲り牛王狀貼を修法早く後僧徒堂内り
れり踊躍をなさん此水即遠敷の神より降りて若列の神より
有河の園にけ水糸師知恩院の法守八岐宮の著る神地の石下に流し止る
あり今日けり水は水師又野り二月堂水取の神地小流し止る
若列より和列より至る水を修りて之修り今日見物の人多し或は若列より
其日二月堂の井小蘇の定りて水涌出りて
○寛文七年二月苗堂同祿を修り小奉さる及び聖武帝宸筆の煙藥修り
聖皇后の華嚴經半王の印少くも火小
損せし幸ら當堂撞の跡小見へり

○藥師寺會式

今日より七日小至付 和列南都西の系村より

南都七太寺の其一なり西の系より造り花散瓶を献じて堂内小飾ふ
依り是を花の會と云

○佛光寺餅撒 伊賀國山田郡千戸村にあり堂内より餅千の餅と
まれば諸人小施をば餅と指ひ得るその福ありとて詣人夥しく餅と指ふ

は餅の中に鉄を畏る餅三ツあり是小虫ふりのハ必福を得と云

○鬼押の神事 伊勢國鈴鹿郡津惠日山觀音寺小籠これを行く
未ぬ渡心會の法事ありは時當番の氏子青竹と持てエイクと云

寺内小籠入ま六糸指群集して曰くエエエエと大聲もくこ夜咄り侍
交あり次は牛王頂戴の儀式を初むは神名帳と續む供物小籠の子芥

あり 各本はくはる法事小籠あり 伊勢二座の月勝田を交ありて能三番あり是
と伊勢の神樂と云能平と鬼押の神事あり是當寺の奉る元胎天皇

和朔二年乙酉二月二日安濃津の浦より漁夫の網よりて出現のとい
悪鬼來り像と奪んとて一城遊掛ひ一例なりと云

其武庭の四面小籠を焼きて堂内より標を散を札調り打を相圖とて
右百人各散を札し向双を掛へエイクとて一州を白くして奉給の奉と圖

む是以鬼押と稱し阿濃津の彌陀これを勤む暫く引て松明を先送毘沙門と
稱して是是なる者大掛子琴柱にうけ鬼の前驅を次小鬼二人曰く是是を

着し一人と稱の子毘沙門を一人と稱し持り堂外を走り是を引る者十人持
を打振款を掛しとて鬼の若は小籠を打り其是を引る者十人持

を引ると引の者これを掛んが若は持を引て互小打合し其是を引る者十人持
三西よりて終小本堂の後小退上ふは鬼を強く撃て其是を引る者十人持

ははれを得るのありとて衆令狐惱す人打ん是を強く撃て其是を引る者十人持
儀没して偽令過りて打散りとも遠れはれ由澄文を引る者十人持

奥更と後入るが遠物なりと云

京師

諸國

二日 ○藤森祈年祭 山城國紀伊郡深草里小あり 申半神神供

○住吉祈年穀祭 攝津國住の江小あり 五穀豊熟の祈なり

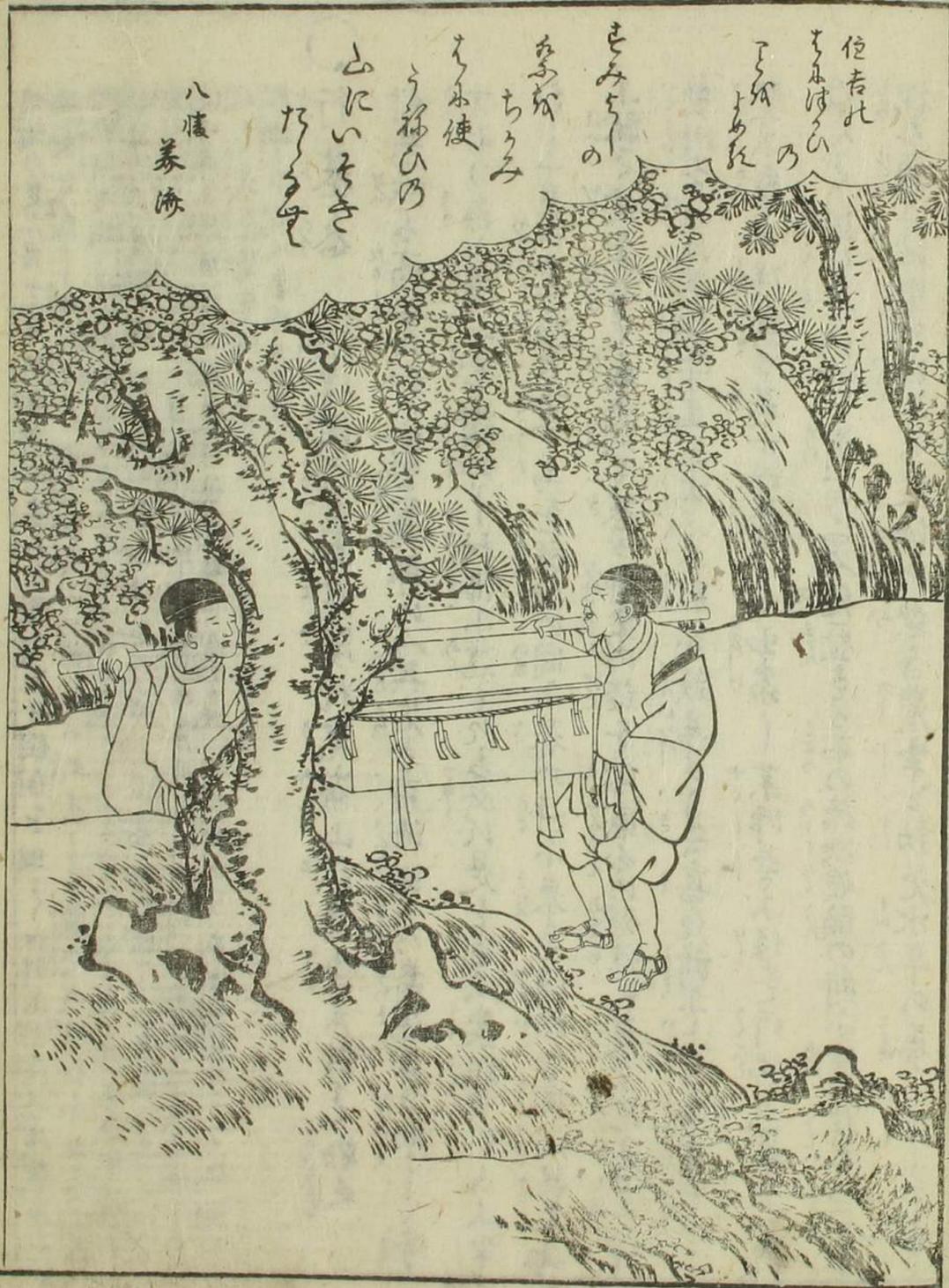
其武神小籠を井を之殺し其是を引る者十人持 是を引る者十人持

○同埴使 此一日より神人大和國香久山の遠畝火山口神社の山上小列

埴を取今日位吉小歸ふ 畝火山と幸鳥山の上此山ありて八本村の南一里小あり

皇后と日牟紀云神武天皇天香久山の埴土を取八十平瓮を自ら造り

かりはしる諸の神を奉り天下に謚さむ其土を取所と埴安と云



八
養
海

山に
いそぎ
たつ
ま

う
福
ひ
乃

ち
う
み

ま
み
の

ま
み
の

位
吉
此



二
月
朔
日
振
津
住
吉
埴
使
發
遣
の
圖

三日

○知恩寺百萬遍數珠拜見

洛東にあり世に百萬遍と云ふ

浄土宗四箇本寺の其一なり此數珠之後醍醐天皇元弘元年天下疫死
する者夥し帝これを深く哀憐たまひて當寺八世善阿上人に勅し
持念せしむ上人一七日を限り唱念佛を度一百万遍時小疫病消除して
弟氏慈眉を問くこぞ成りたり帝大歡感ゆくり百萬遍の拜を賜ひ
且弘法大師の眞淨利劍の名跡を賜ふ後法を授けし時と名跡
弘しゆく幸きやく結流十人一千八十顆の大救珠を採周りてあや
百救きれば百萬遍を得るとあり

四日

○新年祭

朔日より今日まで修三會の法あり

官家より奉書と賜ふ例あり
夏は正月七日の案下に記す

故

○箕面二富

朔日より今日まで修三會の法あり

故

○甲申小始の神祇式

二月四日新年祭の神子二百二十二座の内神祇官の
神七百二十七座 案上 國司の祭神二百九十五座を公事根源之是の
大神宮以下二百二十二座の神をまつはせり其祈のたよりありと云

もあつ國々小との幣はほち諸國も年々ふまけりては之神祇
官あつ行はれ辨ふてより法皇のめり物成備しそのよ白猪白鷄や乃

六

物ち東天武天皇元年二月をたもと此祭あり大か新年の祭月次西
夜新嘗祭をば四箇の系とて烟の大事と云はるり 又新年穀奉幣の

五

二月七月二つありよれ日しとち房社二社
廣瀬 龍田 住吉 日吉 梅宮 若田
廣田 北野 丹生 貴布祿
日と宰相其外を皆四位五位のほひなり社二社とのく宣令あり伊勢と花園
の帝賀茂松尾の紅梅其外を系系なる紙書と云

四

清盛と刑部卿平忠盛が子なり 一説は白河院の清盛と云ふ
安藝守小任は保元平治の軍功
以上の播磨守小任は平治の乱小源義朝を亡してより獨武家の棟梁と云

三

清盛と刑部卿平忠盛が子なり 一説は白河院の清盛と云ふ
安藝守小任は保元平治の軍功
以上の播磨守小任は平治の乱小源義朝を亡してより獨武家の棟梁と云

二

清盛と刑部卿平忠盛が子なり 一説は白河院の清盛と云ふ
安藝守小任は保元平治の軍功
以上の播磨守小任は平治の乱小源義朝を亡してより獨武家の棟梁と云

一

清盛と刑部卿平忠盛が子なり 一説は白河院の清盛と云ふ
安藝守小任は保元平治の軍功
以上の播磨守小任は平治の乱小源義朝を亡してより獨武家の棟梁と云

〇

清盛と刑部卿平忠盛が子なり 一説は白河院の清盛と云ふ
安藝守小任は保元平治の軍功
以上の播磨守小任は平治の乱小源義朝を亡してより獨武家の棟梁と云

大坂

○天王寺芥田坊法事

未別

京師

○五日 洛東東福寺五大堂不修火難除の神事を起

洛東東福寺五大堂不修火難除の神事を起は春の文字去勢の
法住寺志平と(愛井小洲)瀧一ありと是を授け門戸小押火災及び
疫癘を除くと云はれ松門ありの大工業代これに於て日家より神事を起す

京師

○六日 仲哀天皇國忌

仲哀天皇國忌 八幡小宮に於て勅之帝の天皇十五代ありて年級小あり
小堀遠別忌 洛北大徳寺法頭孤蓮菴勅之遠別寺縁一宗通の菴あり

大坂

○天王寺太子堂修二會

今日酉の卦樂人音樂を勅む

諸國

○住吉御唐煎 振別

明日神人和列畝火山の垣を取其土を以て四日小平

瓮を造り五日御瓶用の神供あり今日其神供を悉和してこれを裁くと云

○祈年祭

倭勢内宮不修奉幣あり案の時令順度ありて災ひ

るに祈りあり朝使至るの日大神宮司使者を引く外宮内宮小幣帛を
献ふ別宮攝社も小献るは是皆朝廷神祇官の領りなる所あり

京師

○七日 梶井宮二月堂行法

洛北大原にあり

○建仁寺護持出

洛東あり

諸國

○新修

今日より十四日止

和列南都興福寺南大門にて勅之

或説云興福寺二月の法會夜陰ふれ寺僧春寒未堪どして門前より
薪を燒其光よりほつて佛像をたし長夜の戲とんと云又云昔西金堂の

修二月會ち弘仁十二年より始り東金堂廿八相の花西金堂二十二相此
花合をく六十種の香華以飾り擁護の祖神権實の諸佛を勅持して
供養せし清和天皇貞觀十年大風鳥樹を伐雷山孤崩一地を穿ら

修小西金堂の前小穴ひく川開く其南大門の芝小抜は穴より魔風吹て諸堂諸殿の瓦門扉を吹揚り散れき雲收り風止後去れ去りて曰天子信星出天子の愁四海小賊起て我國の正法盡かんや虚空小信りて大衆會議區々小して是とは法會のあら外世として絶る以起し西金堂の法會と南大門へ移して行つ所是風穴の末は所小用とす所ありは會及昔よりより陽とて晝夜をよりば多くの薪を焼く昔唐人本く西金堂の場小く此薪の光小踊舞志ける中かん其前後小松院明德の頃と二月會の宵舞小く一七日南大門に於て猿樂試をす其頃より上陽の薪の修験を無り火として手水屋の内より猿樂の藝社を施と極小薪の修とす

此役を金春親世保生金剛の口座に業にして今に座共小東武小僧一毎年二座宛去年十一月神宗の教より南都小ありを勤む今日より座の役者より勤む八日も不修の勤む九日乃至は初日の一座衆徒小告く君家の勤む於て宮社修り十一月より十二月小ありを勤む十日も亦次座修の正しむを雨ふる時其時衆徒の檢校猿樂を修あり雨を芝生の上より雨を試し其時衆徒の檢校猿樂を修あり猿樂試修七日の雨修り十日除時これを勤む觀世を其の樂屋と

○二月堂水取大續松 夏も朝日の東下にゆり

○八日 推寺修二會

○攝津國島上郡原村天王祭 原五ヶ村の生土神ありて牛頭天王をまつ社あり繩をのりて大なる蛇形を修り松の本二奉を立て是小流り先其上四方一回の的を上げ是を蛇の目小表し神系頭家の者上下狹者川向ひら糸二条と携へ的狹移り甲の矢を射乙矢を射狹相圖小々村二ツ小別は波蛇形先頭と上紐口箇村 上条村 東条村 中村 西条村 の者山上へ引登るとするを下紐一箇村 下条村 の者蛇形の尾を曳く山下に到ると川を回ると互小曳合夏徳曳のてく修小蛇形を曳断く左右分内 下紐と一村をた 傳之性昔は川の測小惡蛇怪し狹退治せし遺風ありと我

洛東後園御八講 今絶て盡し御八講ハ 勅會より行つ法華經の宸宇也



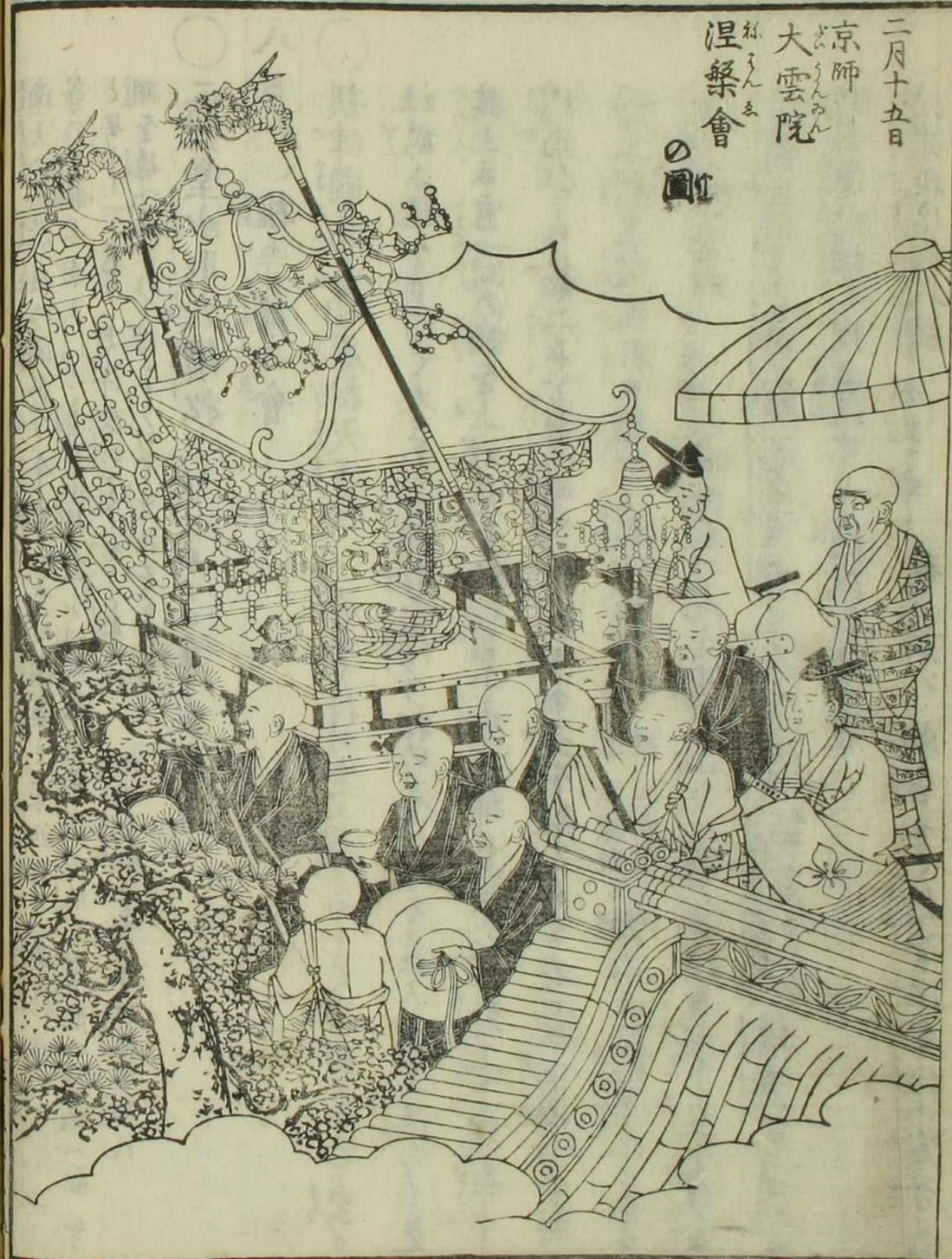
仲亮

別

志

心の國

唱唐も



二月十五日

京師

大雲院

涅槃會

の圖

義あり八講の台家より行ふ法あり 其式は八講壇とて兩壇相対して同者とて
法華經八卷の大意を講べ別小論題を設け 凡そ右座の佛名と曲節を付く唱ふを
論義あり其外伽陀明散華ホの法式嚴重あり
○釋迦堂遺教經會 又訃會也云 上京五辻本坊にあり瑞應山大
今日より十八日迄

報恩寺 又千手報恩堂ともいふ 真言新義洛東智積院の別院なり 依り智積院の僧

衆これを勸む此經と釋尊入滅の時佛弟子は為小遺誡しぬの經あり

故小遺教經と云訓讀會と云此經を訓讀を内調なりは寺の用明

天皇の清寧小茶制して後猫間中納言光隆卿は所小徑せりあり

今の奉堂と奥列の藤原秀衡建營して如珠上人を請て是處の

中興なり 秀衡上洛の時車の輪今も在りて寺内小あり 諸小遺教經小系より

寺記云 等持院殿 尊氏降府命 命本寺令行 涅槃

槃講云云 親長卿記云 明應四年二月十三日 千本釋迦

堂遺教經 聽聞云云 洛北貴布禰社五穀系 賀茂の神人糸向して神供奉幣の儀式あり

祭神二座高麗真の御系と閻龍此御神と倭特諾尊火の神迦具突

智を斬る三段と云一ぬ其一段高麗と云即是貴船の御神なり高麗

と閻龍と龍神なり雨を祈り雨を止る小は神と云ふ時と靈應若し

大通寺遺教經 洛南東寺の 其外諸寺少く亦乏

泉涌寺舍利罔恨 今日より十八日迄 二重の金塔小安を佛牙の舍利

と云佛涅槃に入ぬ時羅刹足疾鬼に咬つ佛牙を奪ひ去りて

韋駄天降伏を加へ取止先々晝夜恭敬して身を放さば佛滅後一千六百

餘年と歷く大唐白蓮寺通宣律師戒香薰修の威徳冥感小通一韋駄

天形を現すといひ三帰八戒を受其報恩として此舍利を通宣小授り

しる人同傳り白蓮寺の寶函小秘したりしが泉涌寺中興祖後仍

律師の末裔湛海嚮師の入宋せり芳跡を慕ひて彼土小渡り白蓮寺小爲り

舍利を拜し仰信の修り竊小古老の頑徳流るるに慈念人として佛舎

利の利生他小異りて官家の崇敬厚く守護嚴重なり故將來の至

り

遠世空しく幸彩小帰ふとてども志氣猶止まらず再び入京の計と云は
二階の樓門三重の塔婆を構へて船とに隠軍に列し先白蓮寺の修造不日
して成り大衆其深志を感し遂に佛舍利を附屬せり湛海欽存の派と
押へ佛牙と持して帰帆の纜を解き帰舟して當寺小収むと云々

○第六天神祭 浅州津彦系小あり系神天神第六面足惶根の二尊なり

○神軍 佐渡國康伏小別奉今夜風雨烈しく明日小あり快晴と云と
神軍より其跡小矢の根石多く落敷る有里信これを抱ひて守と云

十日 ○賀茂氏人饗應 氏人東西の両家小別てり今昭日
東西上頭ありて氏人と容意と

○北山鹿苑院天神祭 鹿苑院の南田圃の社人よりて的を射ふ

○五條天神恩頼祭 天使社又挂官と号し 祭神少彦名命 神傳節分の
祭下に云云

十日 ○大原懺法

○列見 今毎一公夏根源之上卿辨外記史を多うて大改官して六位
己下の懸能あるその派えりしく式部兵部之二省より率してまひまるを

上卿先々々々々々量容儀を見り心より排頭善と上り己下冠小彦之長
を獲のり小納言の櫻乃花春後六位と降仕りて是之非春後以下の時を
さしと云々

十三日 ○菟原住吉祭 摂津國菟原郡住吉村まつり

○氷上祭 周防國吉敷郡高原氷上山まつり山を比叡山を摸り靈
地より 性苦ハ大衆よりて靈驗ある所あり多々良家より千手百味を供し奉
て世に運の来りし天文八年降りて是れ北原の星の来り
絶つ今小至りて供土中に埋まると土石と敷いと並石礫石土饅頭と云
防を瘡疾成裁の樹刺厭と云ふ験有

○二月堂大松明水取 丑刻より寅刻まで夜更に朝日の来りに記決

十五日 ○今日諸寺院本坊より涅槃會修行 涅槃像掛か

天皇遊維衛國淨飯王の妃摩耶夫人一夜金人天降ふと云々孕とあり
四月八日太子降誕と云々 周昭王二十 悉達多と名づく歳十九ありて極物
山小入證道を修むると十二年二十歳の冬臘月八日曉成道し云々

嘗て淑母夫人の誓不いちげく夏九旬あきせうの間切利天きりてん小上こじやうて法を説とゆふ又一切衆生の
誓不いちげく無上の法を宣説せんせつしのりてし四十九年しゆじゅうく法華七十九二月十六日ほつぽうしちじゅうきゅうにじふにがつじゅうろくにち
五代ごだい鸚鵡草ひんごそう普ふ不ふ合がふ 沙羅叢樹さらかそうじゆの下した少すく大涅槃だいねはんに入いりて釋迦牟尼佛しやくたにぶつと云いふ

八滅の躰たいを画えき今日寺院けふいん小掛こかけふ今俗家けふぞくけに震解ちんげ豆まめと焚物くわくぶつと供
東福寺涅槃像とうふくじねはんざう 繼ついで八回はちかい 兆典ちやうてん司し筆ふで服ふく小應せうおん永えい戊子ごし十五年じゅうごねん六月ろくがつ書か行ぎやう年ねん

五十七歳ごじちさいくは像ざう相好さうごう殊勝しゆせうめりて世よ不ふ名な鳥とり兆典ちやうてん司し大だい道だう和わ志しん
派は子し少すくと諱いみなと明めい兆ちやう字じ吉きち山さんと号ごう以い天てん性じやう佛ぶつ画え妙めうと得える當たう特とく縮しゆく荷か

明神の靈めいじん告こ小せうのく彩色さいしきの具ぐと後ご山さんり得えると云いふ外がい日にち等とうの五ご百ひやく羅ら漢わん

二十八にじゅうはち僧そう教きやう音おん應おう身しんの像ざう三さん十じゅう幅ふく等とうあり皆みな絶ぜつ世ぜの奇き品ひんなり

今日けふ都みやこ下したの貴き賤せん遊ゆう客かく群ぐん参さんり是こゝと旅たび厨く始はじめと云いふ宗しゆ師しの方かた言ごんなり

今日けふ諸しよ寺じ小せう掛かけふ石いしの涅槃ねはん像ざうの中なか名な画えと称なづさる之の佛ぶつ光くわう寺じ新しん坊ぼうの像ざう
唐たう多た涅槃ねはん教きやう西さいの岡おか長ちやう法ぽう寺じの像ざう唐たう筆ふで十六じゅうろくにち日にち京きやう極ごく通つう盧ろ山さん寺じの像ざう思し基き等とう佛ぶつ思し王わう如にょ來らいと云いふ非ひ方かた一いつ老らう婆ぱ衰さいんで佛ぶつ足そく小せう像ざうを意いす又また今日けふ二に條じやう通つう本ほん愿げん阿あ

善導寺ぜんどうじ小掛こかける石いしの三さん十じゅう二に相さうの觀くわん音おん十六じゅうろくにち羅ら漢わんの像ざう最さい奇き觀くわんる其その好こう寺じ

院いん小せう安あんと石いし不ふの名な画え多たく繁はんよりの略りやく之の後ご編へん不ふ記き

大雲院だいぐんいん涅槃會ねはんかい 京極通きやうごくつう日にち系けいの南なん小せうあり 已い別べつ釋しやく迦か佛ぶつ像ざう 惠ゑい心しん作しやく

興かう小せう宗しゆ世せ衆しゆ僧そう香かう華わ以い捧ほうげ行ぎやう樂らくを奏そうして幸かう堂だうより羅ら漢わん堂だう小せう遷せんし

樂らく法ぽう事じあり日にち中ちゆう舍しゃ利り會かいを修しゆし申まを別べつ秋しゆう尊そんの像ざうと幸かう堂だう小せう遷せん座ざにし

め法ぽう夏げ音おん樂らくあり岡おか山さん貞じやう安あん上じやう人にんより之の事ことと勅とくむ上人じやうじんの傳でん十六じゅうろくにち日にち

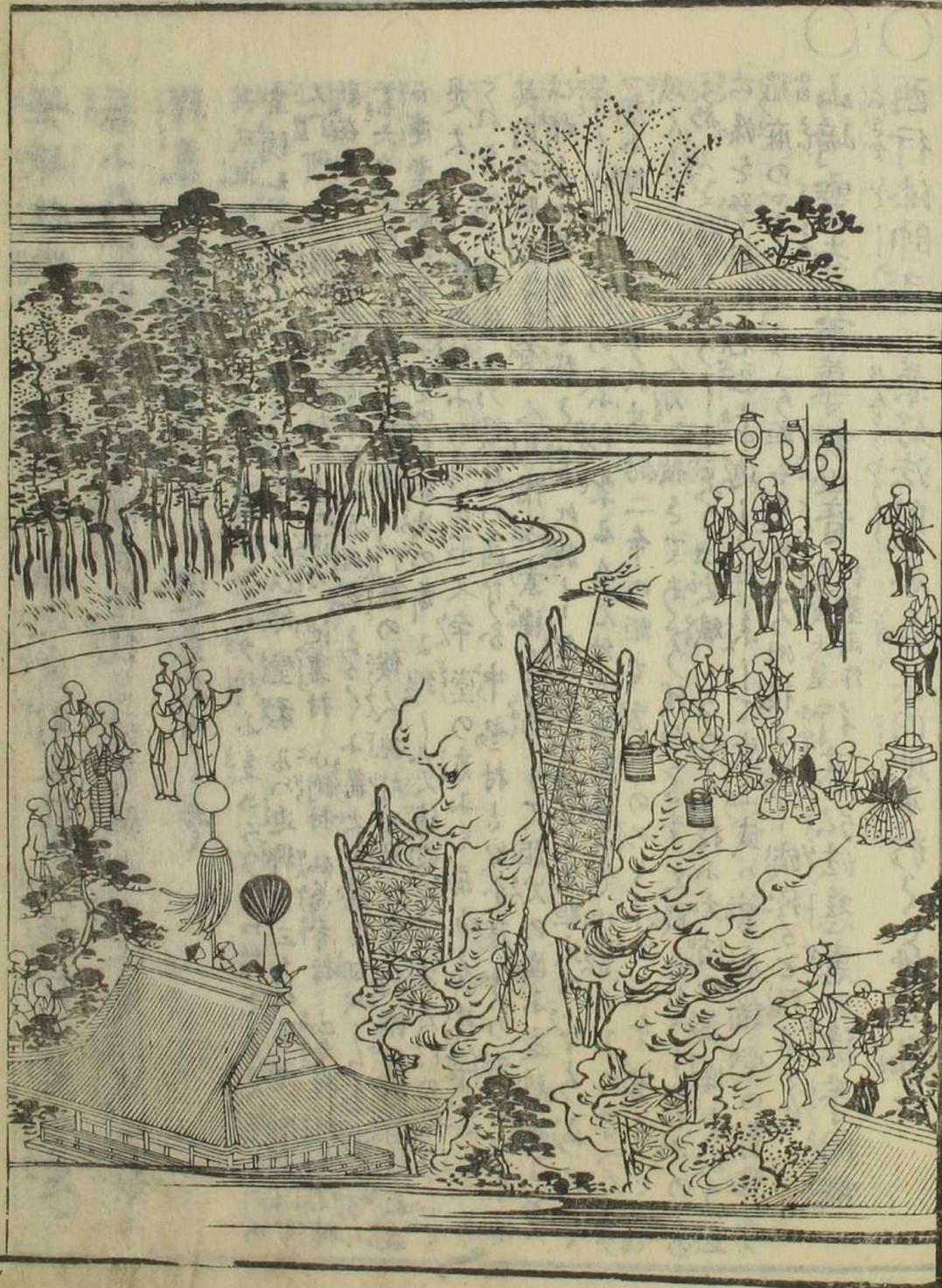
淨福寺じやうふくじ涅槃會ねはんかい 一條いちじやう千せん本ほんの東とうよりあり 今日けふ來らい迎むか會かいを修しゆす 報ほう恩おん寺じ舍しゃ利り岡おか帳ちやう 小川こがわ通つうの西さい上じやう之の賣ばいの北きたよりあり 此こゝ舍しゃ利りと始はじめん室しつ町ちやう

女院にょいんの持もちり女にょ院いん興かう正じやう菩ぼ薩ざつ 兼かね室しつ山さん津つ任にん寺じ 中ちゆう真しん岡おか基きしを御ご帰き依い成じやう候こうと云いふ

より是こゝを寄よ附つしのひぬ於お是こゝに之の兼かね室しつの津つ任にん寺じ小せう安あんと云いふ

後ご放はうあのく苗なう寺じ小せう納なつむ 女にょ院いん自じ等とうの寄よ附つ候こうと云いふ

- 今日けふ諸しよ寺じ院いん小せう終しゆうる舍しゃ利り會かい岡おか願げんあり
- 梅尾うめお四し座ざ講かう式しき 高山こうざん寺じと号ごうり 洛らく水すい梅ばい々々細こ小せうあり



○ 嵯峨柱炬

清凉寺釋迦堂前小於大續松三基を建て
暮小乃び火を焚く各續松を繞り鉢陀羅を唱ふ是西域に於て
釋尊の遺骸成茶毘す遠意なりと云

其式釈迦堂の茶毘に同許の大炬を三ヶ所小炬を三ヶ所
兼好法師忌 兼好法師忌各其旧地中於て續松勅じ
山崎寶寺奉尊親母音 聖武天皇行基弘法慈惠の像等用帳
西行法師忌 兼好法師忌各其旧地中於て續松勅じ

○ 増上寺涅槃會

其外江戸寺院各勅之
卷く二編小出ん

○ 天王寺六時堂涅槃會

舞樂あり

○ 多田院系

攝津國河邊郡多田庄鷹尾山法華三昧寺と云當院の
源家の宗廟ありて満仲頼光頼信頼義頼家等をあはす

満仲公記文云 吾没後留置神於此廟窟可護予箭家加之以
當院鳴動兼而應知見四海安危也亦云源家之安危者

○ 可レ依當院之盛衰云々

満仲在判

○ 南都興福寺常樂會

東金堂小閣浮檀金の釋迦佛の像あり

厨子小安に其扉小涅槃像以画く相傳ふ巨勢金岡が筆なりと云今日
其扉を開く 涅槃を梵語なりて減度と云又常樂我淨を涅槃の四徳
鹿走 南都春日社の廻廊に猿樂のを文年頃の役人と傳ふ前を奏す

○ 彦山権現祭

豊前豊後筑前の三國に蟠根を山人山あり十の谷早

九の靈堀あり二岳鼎のてく岨てり祭神北岳と天忍穗耳尊南岳

伊弉諾尊中岳と伊弉册尊方り其一の巖岨を王舎と雖も権現垂
跡の靈地なり崇神天皇の御宇に八南の水精石影を岨中より清泉涌出
これ以て飲んば長壽と保れと云 今日系傳の人難く
山岳を巡る者もまじく

十六

積塔 盲人檢校以下衆分々至る近高倉五条坊門の小清履
菴小集會一光孝天皇の皇子兩夜御子の為小石塔會を修む 清履
菴小集會
座上小守誓神の画像と掛てて神をある 守誓神と日吉山玉井社の中
十社をとりて
相傳人兩夜皇子 此皇子齋
記小別題也 誓者を致すなり其報恩のため先小衆盲
忌を勤む天皇も亦上賀茂封境の中に田地若干とまじく宿る盲人
と恵ゆ今田地社司の有るは遠國より盲人始り京師小町小集會
宿を定め者賀茂の社家小寓と云又二條新地又吹道場園名寺
中寺時 天宗
小光孝天皇の塔のり盲人と云
今日式正而小集會を修む其
神は未だ結対家小瓶子を
飾り全招の儀にて雄の標
左は付室を奉の壺と云
塗る上よ色々の紋を猫金画
金瓶を折るは採ま右の色解
と積塔の由は

鳴門と云ふ琵琶を箱小納め是を並く在右あり今日用ゆる所の
琵琶を飾る所の外の一老琵琶城と云守誓神城守護して清履
菴小集會の男素禊と云守誓神を座上小守けて神酒を供ふは時
衆盲の平素禊神を納めると云て是を巻納先唐持入
御師小送り師を修む太平の壺を圖さま付と云く本の枝なる
拍を有り大甕を修む酒を瓶に小瓶入る酒あり盲人至小名と
高盛ありてこれを出入者著を修む昆布豆腐芋の類
式始先の如く守誓神の男素禊を着して給仕は次は酒を共
後琵琶を修む平素五段を修む進出は日句遊三人は京師
に至りて石を修む塔の形を修む是と積塔と云乃兩夜の室に遷福
の意なりと云琵琶及び平素の
半を六月十九日の祭下に記す

御影堂踊躍念佛

五條橋の西小あり新若光寺と号し時宗

奉満寺日蓮上人像開帳

奉満寺日蓮上人像開帳 系極今此川の山あり

大雲院貞安上人忌

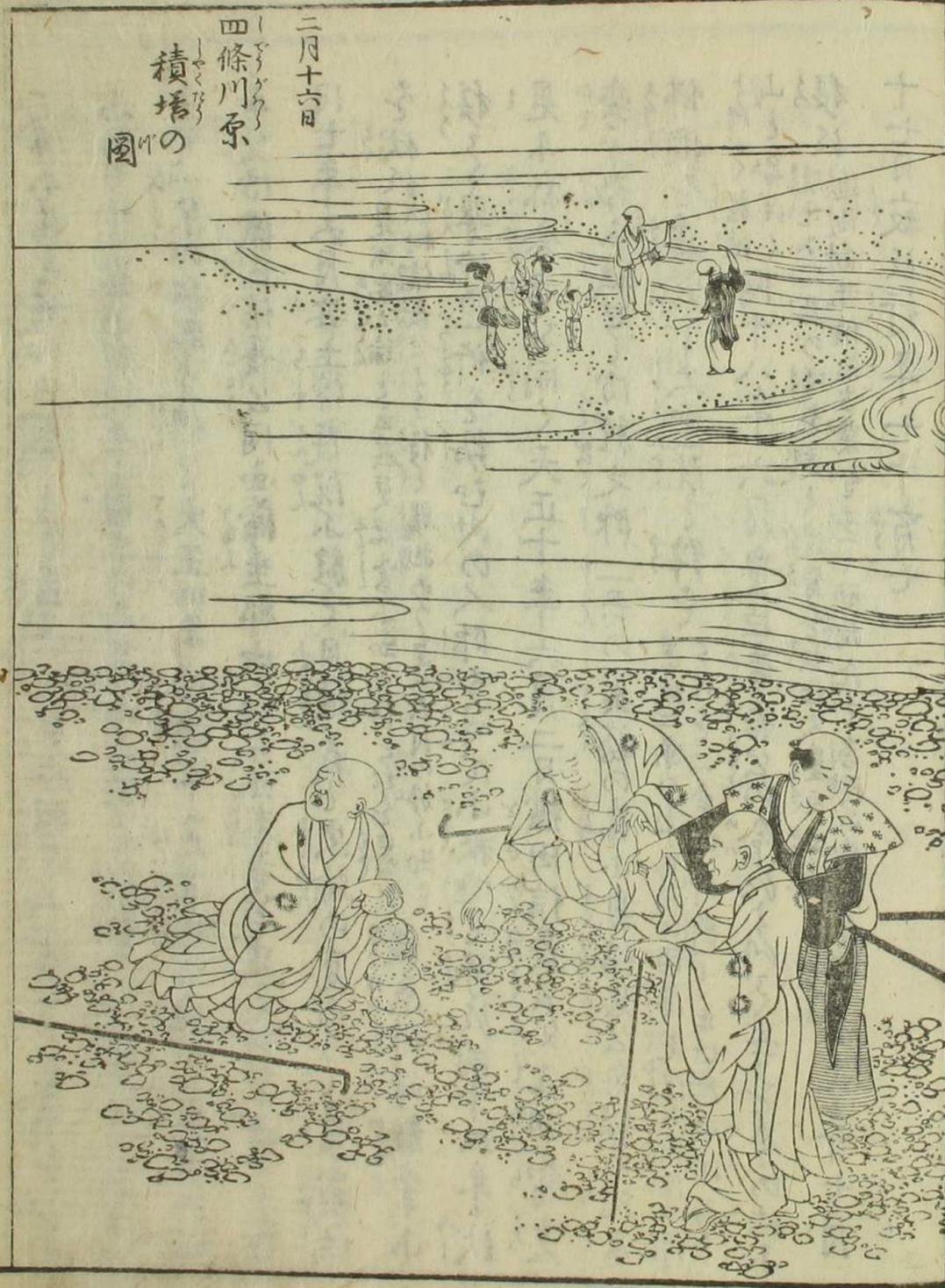
系極に系のあるあり 上人の像は十月
十二日の祭に記す
上人御祥忌七月十七日
今日取紙てこれを修む

貞安上人講と退魯父の北系某相模園黒沼郷の人なり母養満

貞安上人講と退魯父の北系某相模園黒沼郷の人なり母養満

月堂を照さや見く孕む天文八年己亥三月七日生ふ知して

二月十六日
 四條川原
 積塔の
 圖



附言
 三春の間紙をりて扇ある奴ふん
 どの形と造る風小敷してそり
 揚ふ名く紙書とらへ國末とて
 多古と云張久意造まらうや
 又韓信敵陣の遠近かそらんがふ
 造るふしもつ
 或云幼見と内は陽熱さんふるが故
 去陽の時其其氣益大過を故小紙
 著然そふふはく見童ふはを
 用しめ内熱を便人二物



父母小後を姨母小養まて成長せ其性敏悟英邁小して塵をわふ
志あり十一歳の時日玉小田原の蓮寺小於て菴髪一見卷上人小屬
して一宗の秘蹟を傳了天正四年佐渡國より大安寺と開き後述の圖
本至信織田信長公同玉浦生郡中村小西光寺と建す昨と居しむ
日七年六月安土淨嚴院小於て日蓮義と宗論の交ありて竟小彼徒
を伏し是孤安論と云其交法書小出されこれを思ひ後京師淨教寺小
移す専修の一行を勤む附の人際を守りて小親迎と号し同十八年伏
見小称念寺と開く天正十年六月二日織田信長公父子明智光
秀が為小裁せし内於之際二君の冥福の爲小息信忠公自殺の地小
佛閣を建營し大雲院と號し其他二条の南馬丸の西陽光院の及淨所
山と名づく池同十八年六月豊臣秀吉公の命によりて寺と今の地小
移し遊園井備後吉栗聖堂と助殉死を尚懷慕あり元和元年七月
十七日寂行年七十有七

十八日

○大悲山峰定寺觀音會 鞍馬の小五里許別本村小あり山勢
高峻りて幽邃閑寂の地あり 幸堂梁の銘小云平清盛奉召りて縁起を
行ひ住者の浦(即)君子と取小ゆあり是未だ廿二日聖靈會の曼珠華小
貝を付く舞臺の尺隅小まき舞樂を奏するなり其貝の形様の花小
似たり是を筒花小付は貝今日浦小雲房(龍)神より太子(持)とて

十九日

○貝寄の風 天王寺公人六時堂の茶よ於て日和を云幸法

當院幸堂の縁と棟とめて張まり世々傳へ貞安上人安土論の時
日蓮宗の徒法論小負其燈とて彼徒より張とつと非なり彼徒の中
小放逸を愧の者ありて竊小作と書せんと計り狼藉救回小及よ小
豊臣秀吉公陣小備前定小刀と賜ひ不良の案を切棄にせよ小
命せしれ斯に其後路次の狼藉を止むは彼徒の背懐を救せ
や有らん六月十八日堂佛書の時寺内を騷し幸堂の縁を壊しその幸
公裁あるの不被徒の所執終まらば小幸堂の縁を壊し其縁を
これ小刀とて張りて張るるあり遊園天照成申の火災小罹りて幸堂
坊舎焼失しとては極極と遠く幸ひ小親を存せり

二十日

淡間祭

駿河國安部郡府中にある

新宮淡間神社より代々

將軍家より修造せし祭神本花咲耶姫

相殿天津彦火瓊杵尊 建徳寺坊中勅之

今日の祭禮厳重なりて舞樂あり

太平樂 還城樂 納曾利 陵王

府中惣所より狂言遊物を出し

社外小敷く菓を商人 遊郷の者等を買者多し

廿一日

光明峯寺殿下道家公忌

洛東東福寺にて修行

公九條家の紐月輪殿下兼実家の縁より後堀河帝所より人なり

兩本願寺太子會

東申ノ刻 廿二日辰ノ刻 西未ノ刻 廿二日巳ノ刻

下谷稻荷祭

隔年小あり 子寅辰午申戌年新之

廿二日

賀茂松下家に於て後鳥羽院御忌

津家新并津家新

太秦廣隆寺太子會 六角堂蓮基寺下寺町太子堂其外

諸寺院に於て太子會儀修儀

天王寺聖靈會

今日辰上刻六時堂小於て修行あり

今曉寅刻小礼あり三綱を儀し出仕の儀を捧ぐ三徳ハ秋野家の役名あり一番鐘以後寺僧各聖靈院小出仕して講問あり二番鐘

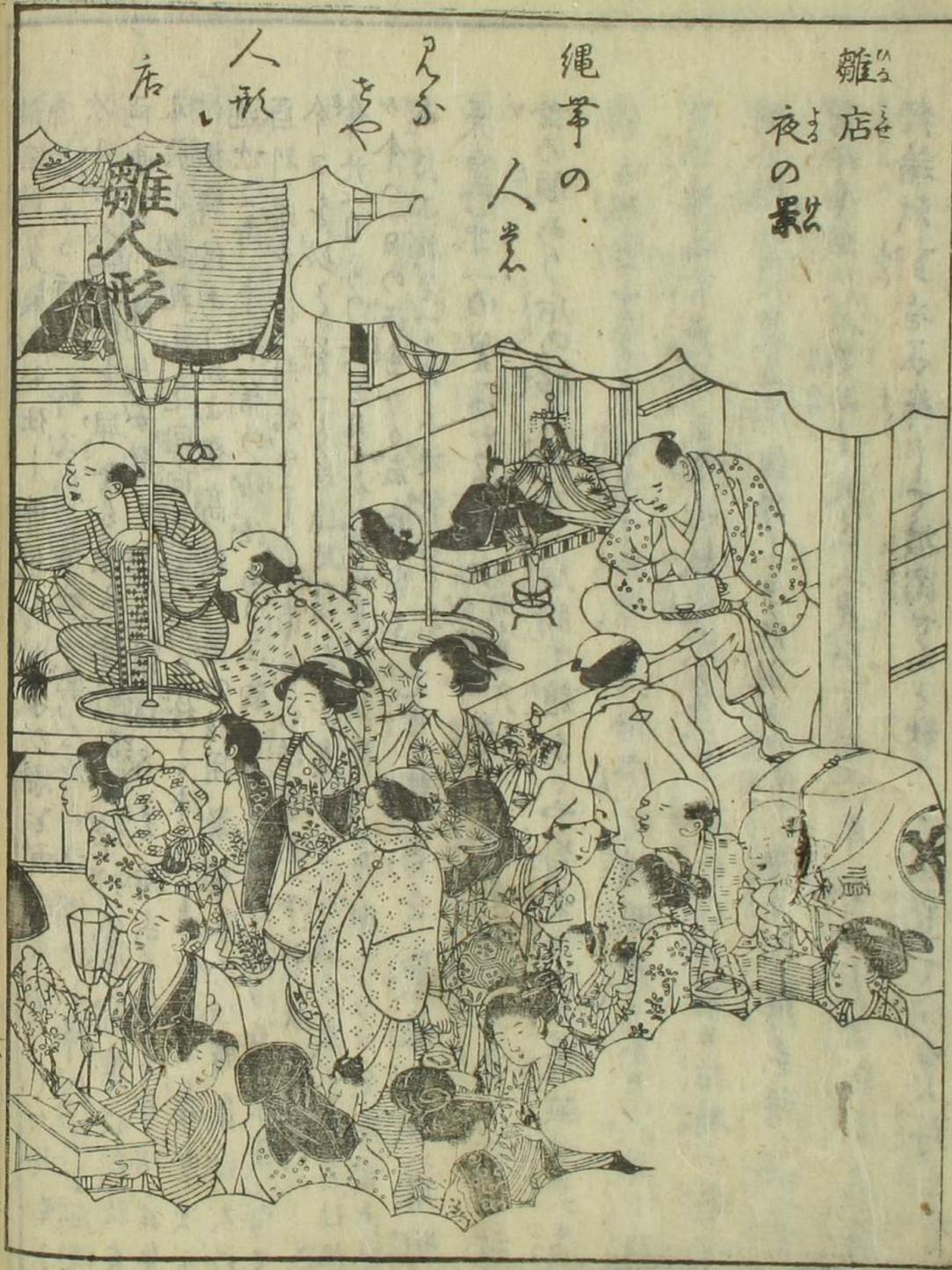
後三綱寶藏小出仕し佛舍利太子の像と兩儀小遊して六時鐘小
作幸あり行列柳子菩薩次小樂人次は寺僧次は擇放次は三綱
次は公人津真を昇り次は舍利あり作樂の儀あり寺僧次は舞臺
兩儀を内陣小安置し衆僧各着座あり次は寺僧次は舞臺
小於て總礼伽陀回向音樂あり終て寺僧着座次は舞臺次は
道次は手水等の作法あり三綱の法用散華ありは時衆儀次は
酉刻還幸行列始のて寺僧の法會年中教養ありはは
今日を以て第一といは日筒花を舞臺の四隅小建ふ古昔は法
會廿一日より廿三日まで行つて百廿番の舞樂ありはは
毎月小織王一々年小経営せし元亨釋書云聖徳太子ハ用明
天皇第一の皇子なり母后佐藤部 養小金色の比丘未て我小救
世の願あり后の胎小託せん后問て誰ありや對云我ハ是救世菩薩
家と西方小ありと云早て中中小入侍覺て後姓身より八月小及
下胎中言声外小聞也教達天皇二年癸巳正月朔日后厩小遊ふ
時小隱んく皇子降誕すまは同く厩戸皇子と號を時小黃光
宮中と照人皆奇まはると復ふ一同六年冬十月百濟國より佛
經論儀貢を奉じて披閱せんと欲と天皇驚て同く對云昔



くわ
此
小
純
と
き
ま
ゆ
か
ゆ

虚生堂
一有

御雛人形
機關木偶玩具數品
禽獸生摹絲細工類



雜店
夜の點
繩竿の
人
人形
店

Illustration of a busy Japanese shop interior, likely a toy or craft store, showing various people and goods. The scene is filled with activity, with people in traditional attire engaged in various tasks and interactions. The shop is filled with various goods, including what appear to be toys and household items. The overall atmosphere is one of a bustling marketplace or a specialized shop.

廿四日

○德正寺蓮如上人傳記 明日巳別 富永四案のありあり

○舍利寺太子會

村紙末の上下下派着し氣清き 終日花綴り普樂と出れ

○法隆寺會式

和州平群郡にあり

○子清年四十九 已上取要

陳の國小在る南嶽住し粗け文を見り 時小年六歳 帝悽恻し一人用時天皇 二年物初守を叛く官軍屢利を失ふ皇子手づく白膠本とりて四天王 の像を刻し警會の中は安し誓て云諸天擁護の力を假く速小逆賊と伏 せば一寺と建營して永く國家の鎮とせん 其年自英兵を率い 賊軍小當り主將守を始先逆族盡く謀本伏は是れ於て根津玉王 造の岸上小寺を營し四天王の像を安し推古天皇元年小寺成難波の 荒陵の東より移し寶塔大殿新と列ね荒陵山四天王寺是なりけ地を 釈する因の地より法論を愛し轉し又極樂界東門小對を同廿九年 去二月五日妃膳氏と共小沐浴新衣して寢殿入内時小薨すの太 子清年四十九 已上取要

○深州西岸寺日上人傳記 今明日 尚寺塔内小親寫聖人の 室玉日君の墳あり

○長福寺月林和尚忌 洛西梅津小あり今明日宝物出侍 并列あり

○江別比良八講 今盡し古昔此處皆山門の領内之は日敷岳より衆僧 ありて神茶生八講と勅む 自經大佛神の夏は八月八日の祭に祀む 是時附社の風波越くまゝ通紙をくまじ

○北野菜種御供

菅公と系侍公と延喜三年二月廿六日

○太宰府小松薨し今日清忌日あり

○吉祥院八講

今盡し吉祥院と東寺西南八町許薨の 氏寺天林の祖父信公建之のあり

○麴阿天神祭

清自画の尊親同殿

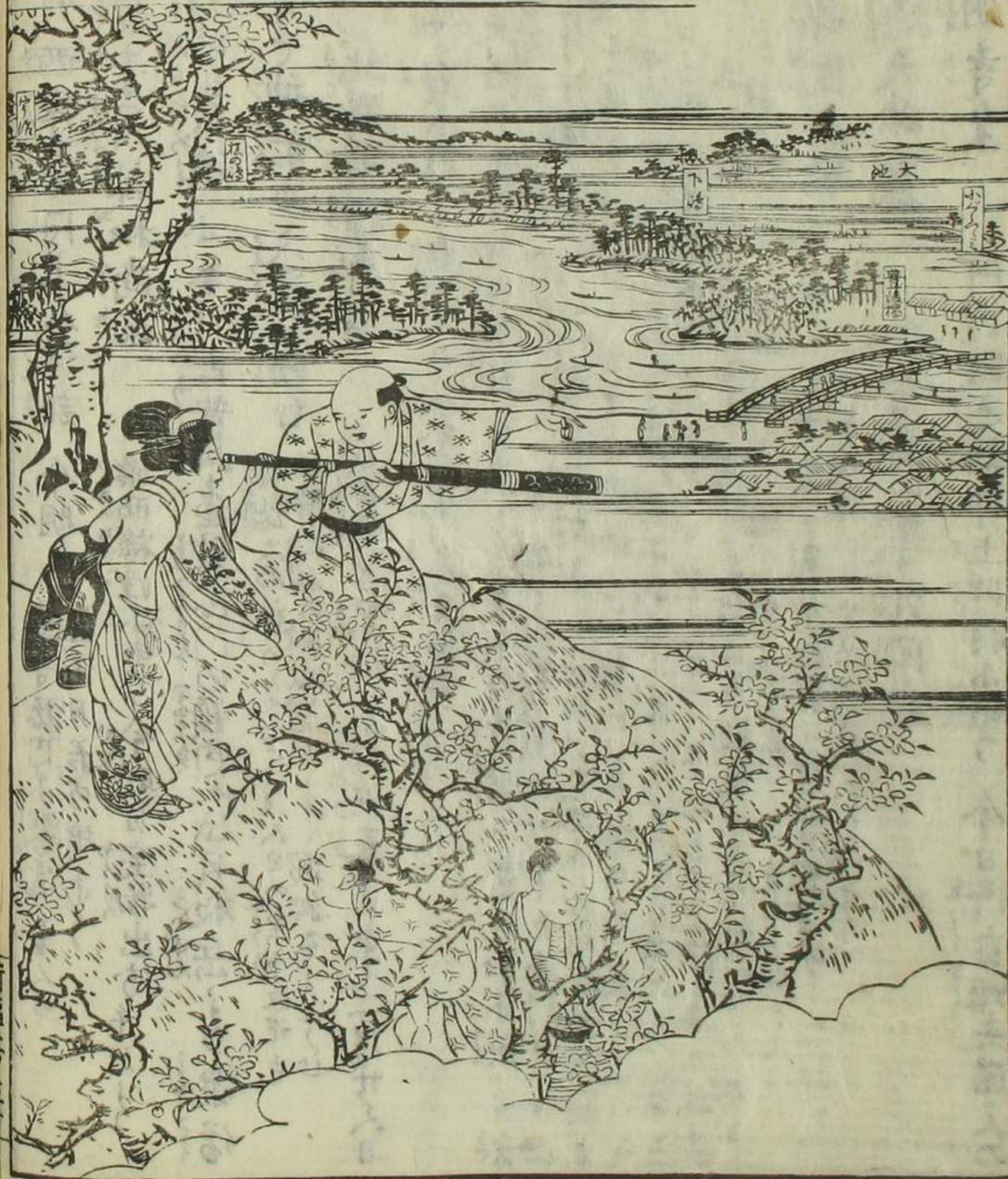
○道明寺祭

河内國志紀郡土作村あり 今日清自他天満文の

六
百
歳
新
合
 入
日
城
の
こ
ん
 本
乃
は
 春
も
 三
月
月
の
 新
道



桃
山
の
遊
宴
圖



像同帳 敬公一夜小歩製作世々荒本の幸尊十一面觀音寺領百七十
天神と云はば又兼尼公補佐を
石依家の比丘尼寺なり推言天皇清寧聖德太子の用基土師連
勅成きて土師里小寺と建ぬ小土師寺とも云五部の大系経を境内に
埋む其上より本榎樹生を 其榎樹生を 中興の経藏堂事尼ハ菅系是
善卿の妹若丞相の伯母なり公左遷の時當寺に來り終夜別を惜し
暇ふ向より四方の鷓鴣啼一 時小若公和奇を詠らる

○ 離市 今日より二月 二月二日女児が飾舞ふところの離人紙に
○ 筑前宰府天神祭 菅公左遷の地あり 寺紀及び園 画本二編より出
○ 離市 二日の夜お祭止 二月二日女児が飾舞ふところの離人紙に

廿八日

あふと浄殿まこいも道具這子人形の教ひを商ふ京師と四糸五糸の
江戸と中橋尾張町一町目十軒店麹町四町目大坂と浄堂前町
月あり夜と燈燭と糶し光乾羅綺杉粉小映し行人の目と奪ふこふ
はどひて來ふまう還るはんとと拍ありあけあり兼福の橋渡とと
太平の美と謂ん

○ 大徳寺 覆光院小籠と利休忌 利休と泉列場南莊今
市河の人初名と千と和郎と云葉道ふを寄道陳也遊ひと名流はら
兼髪の後京易又拋釜并ととと左衛門右衛門の難を得後小談言の事
ありて臆ふ

紅梅

○ 京極言願寺 未開紅 〇上賀茂正念寺 高紅梅 け寺と盛寺と云
いり西の法陣響くまゆほく此梅と愛して和奇が極ん
と先こく梅けりつたる赤霜と露とと人と折ふと花とん 西川
け梅よよのし里信傳とととあうけ梅とらよ

彼岸樓

○京平國寺日妙光寺

絲樓

○京清室御殿内

難入在中

○上京蓮臺寺

○大坂隆專寺

軒の絲樓と唐山

○智惠院波女樓

用花の時葉は紅心は白く葉は青く

桃花

下旬 ○伏見桃山

○京聚落桃園

○平國寺境内

○大坂高原日下寺町

○泉列父鬼村

○河列若江那稻田

其餘可く多し一唐山は花を多く桃花を以て春色第一と云ふる也
法書本身史記李廣傳本桃李不言下自成蹊と云くも春色の春
と謂ふ也

諸國中行事大成卷之二 終

